

Book Reviews

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00055255

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



新刊紹介

○ Species Plantarum Project: *Flora of the World. Introduction & Irvingiaceae* B5, 91 pp. & 25 pp, 1999, Australian Biological Resources Study, Canberra.

このほど Australian Biological Resources Study から上記の2冊の本が手元に届いた。

かねて日本の植物分類学界でもしばしば話題として取り上げられてきた「地球植物誌」が現実に1999年を以て出版され始めたのである。Introductionの冒頭に「地球植物誌計画 Species Plantarum Projectは世界の分類学者の協力によって、世界の維管束植物のフローラを出版することを旨とする」とある。Introductionは執筆要項を示したものであり、主要部分はGuide for Contributorsの章で、ここでは文章例も示しながら、科・属・種の各分類群の記述の仕方が解説されている。続いて35頁にわたるGlossary、最後にThe Geographical Systemの章があって地理区分の説明に当てられている。分類群の解説のスタイルは現在進行中のFlora of Australiaにほぼ依ったものとなっている。

これで、Flora of the Worldのスタイルは決まったわけだが、問題は誰が名乗りをあげてどの科を執筆するかにある。その第1号がD.J.HarrisによるIrvingiaceae (Rosidae-Sapindales)である。この科は熱帯アフリカと熱帯アメリカに3属10種ほどしかない小さな科である。このように小さな科については比較的近年中に続々と出版されるものと思われるが、大きな科についてはどうであろうか。全体のスケジュールや完結目標年度は記されていない。

本プロジェクトの推進委員会は21カ国34名の委員からなり、日本からは委員として岩槻邦男・大橋広好の両氏が参画している。このプロジェクトに日本からも相応の貢献がなされることを祈って止まない。

(清水建美)

○ 金井弘夫：地図で見る「日本地名索引」中部ブロック版（関東・中部地方）CD-Rom 1998, アブック社 (247-0056 鎌倉市大船 2-14-13), 28,000 円。

植物誌作成や植物分布の研究に当たっては、植物標本の採集地名や文献上の産地名を調べる事は不可欠の作業である。そのため、これまでは、もっぱら金井弘夫著「日本地名索引 上・下」(1981年, 124,578件収録)、同「新日本地名索引 1-3」(1993年, 384,959件収録)、「地名レッドデータブック」(1994年, 82,805件収録)のお世話になった。しかし、これらはすべて大冊で全6巻もあるので一つの地名を探し当てるのにかなりの時間を要したことはいうまでもない。ところで、ありがたいことにこのほどこれらの地名がCD-Romにすっきり収められ、「全国版」「北部ブロック版」「中部ブロック版」「西部ブロック版」として頒布されることになった。私は関係の深い「中部ブロック版」だけを購入したが、これには337,335件のデータが含まれている。このCD-Romには様々な検索機能が備えられていて、知りたい地名の位置や漢字表記は正しい地名であれば1秒以内で出てくるし、地名の一部分から完全な地名を引き出すこともできる。一定の範囲内の地名をことごとく引き出すこともできるし、採集地名を検索・保存して置けば分布図を描くこともできる。出来た分布図は、拡大・縮小ができるし、地点マークは選り取り見どり、県境や河川・鉄道・国道なども表示可能であり、地名の取り扱いは自由自在で便利なことこの上ない。

なお、全国版および他ブロック版の地名収録範囲、レコード数、税別価格はそれぞれ下記の通りである。

全国版	全国（北方四島は含まず）	516,655	77,000 円
北部ブロック版	137度30分E以东, 35度30分N以北	294,262	28,000 円
南部ブロック版	138度00分E以西, 37度30分N以南	336,345	28,000 円

地名の検索が必要な方にはぜひともこのCD-Romの使用をお勧めしたい。

(清水建美)

○ 土門尚三：山形県北庄内の植物誌 A4判, 190頁, 1999年6月26日, 自費出版, 3,500円(税・送料別), 申し込みは著者宛 (〒999-8317 山形県飽海郡遊佐町大字小松字長田 29)。

チョウカイフスマやチョウカイアザミで知られる鳥海山の南麓山形県北庄内地方と、トビシマカンゾウで知られる同県飛島の詳しいフローラが出版された。著者は地元の公共機関に勤務される土門さんである。聞けば、著者は小学生の頃より植物に関心をもたれ、1972年高校を卒業されると同時にフロラ山形の会員となられた。以後今日まで20数年にわたり、こつこつと北庄内地方と飛島のフローラ解明に努力されてこられた。その結晶が本書である。

本書は「代表的な植物の図譜」「植物相」「植物目録」「特記すべき植物」の4章からなる。圧巻は第1章の図譜で、左頁に植物名と植物の短い解説、右頁いっぱいには線画による全体図、部分図、解剖図を配置するというスタイルで、これまでに自ら描きためられた図のうち、チョウカイフスマに始まる当地方の代表的な植物42種

の図が掲載されている。種の配列は順不同で図を探し出すのにちょっと手間がかかるが、それぞれの種についてはよく特徴が捉えられていてすばらしい出来映えとなっている。大部分の草本植物には地下部までちゃんと描かれているのもありがたい。第2章は当地方の植物分布論と各地域の地理学的解説付きの植物案内である。ここでは植物相は豊かで、県産の75%の植物を産する事などが議論されている。第3章では、維管束植物1747種(亜・変種を含む)が北庄内と飛島の分布状況も示しながらリストアップされ、第4章ではそのうち101種が特記すべき植物として取り上げられ、それぞれ簡潔にして多角的な解説が加えてある。

現在、盛んに生物多様性の保全が喧伝されるようになったが、自然史の研究をささえ、多様性の実体を明らかにしてくれるのは、事実上はこの著者のような地方の研究者の地道な努力であることを見過ぎてはならない。
(清水建美)

○ 中国科学院昆明植物研究所・管開云(主編)：云南高山花卉 Highland Flowers of Yunnan A4判, 252頁, 1998年5月, 云南科技出版社, 328.00元。

中国科学院昆明植物研究所の管開云, 周折昆, 孫航, 費勇, 孫衛邦の5名の共著に成るカラー写真による上記の本が昨年5月に出版されていたが、このほど入手できた。手に取って初めての第一印象は、かつての「中国高山植物 The Alpine Plants of China」(1982)などに比べて随分写真がきれいになったということであった。印刷は深圳のカラー印刷会社である。

本書の主要部は、10頁にわたる「景觀図片 Landscape Plates」に続く「花卉図片及描述 Plant Plates and Descriptions」(16-485頁)である。ここでは原則1種1写真, 頁当たり3種, 時に1種または4種, 中国名と中文解説・学名と英文解説を併用というスタイルで、双子葉植物ではマツブサ科からシソ科まで438種, 続く単子葉植物ではショウガ科からラン科まで47種, 合計67科193属485種が収容されている。書名の示す通り、シダ植物や針葉樹は含まれていない。そのうち、日本との共通の高山・亜高山植物は、ジンヨウスイバ・キンロバイ・ヤナギラン・ミツガシワ・ミヤマカタバミが載っているくらいで、日本と云南との縁はそれほど深くないことが伺える。一方、中文書名は高山花卉, 英文書名はHighland Flowersであることから分かるように、掲載植物は必ずしも高山・亜高山植物という訳ではなく、日本との共通種としてはシラカバ・ヤマブキ・ノイバラ・ツチグリ・シモツケ・エゾミソハギ・ネジキ・ミヤマエンレイソウ・エゾノクマガイソウなども含まれている。

ともあれ云南の植物が美しいカラー写真本として地元の出版社から出されたことは、誠に喜ばしい限りである。
(清水建美)

○ 太刀掛 優(編)：帰化植物便覧 A4変形判, 306頁, 1998年12月20日, 比婆科学教育振興会, 3,300円。

帰化植物の便覧であるから、簡潔に情報をまとめた本と思ったら大間違いで、過去の文献が広範囲にかつ深く検討された結果をしめす労作である。本書の主体は帰化植物のリストで、もちろん可能な限り多くの分類群が扱われているが、各分類群の情報として、編者が重要と思う文献の抄録が載せられている。これがすこぶる便利で、利用者には有り難い情報である。巻末の文献リストも編者の同様な目論見があるようである。そこでは、引用された文献に載せられている帰化植物のリストが再録されている。かなりの数のリストが引用されており、これだけでも相当な情報である。

帰化植物は、編者も指摘するように、年々増加しているらしく思われる。また、帰化植物には、思わぬほどきれいなものや姿の変わったものがあり、それを知ること自体、とても楽しいことでもある。こんな気持ちで帰化植物を愛好する人がなかなか多いようだが、そんな人には是非おすすめしたい本である。私の勤務する国立科学博物館の維管束植物標本庫には、久内先生はじめ帰化植物を研究された先生がたの採られた標本と、帰化植物の原産地における標本が相当数集められているが、たまたま客員研究員として国立科学博物館において頂いている清水建美先生の肝煎りで、新しい現代の帰化植物標本の収集を試みようとしている。その一環として、帰化植物の組標本第1集25種の標本を、全国の関係する博物館へ送りだした。帰化植物の調査ブームが起きることを期待しているが、本書がそれに大きな力となるに違いない。
(近田文弘)

○ レッドデータブック近畿研究会（編）：シンポジウム「21 世紀に伝える近畿の植物と自然環境—レッドデータブック近畿 2000 年版をめざして—」記録集 自然史研究第 2 巻第 15 号 B 5 判, 207-244 頁. 1999 年 3 月 31 日. 大阪市立自然史博物館.

1998 年 11 月に開催されたシンポジウムの記録集で、レッドデータブックと保全にまつわる諸問題の特集した号である。

本書は、レッドデータブックと近畿の植物相、地方版レッドデータブックに求められるもの、レッドデータブック作成と利用の課題、身近な植物の危機—近畿の現状、絶滅危惧種の現状—水辺の植物を中心に、植物保護と環境—保全へのアプローチ、討論の記録、近畿地方の植物分布図文献一覧（予報）などからなっている。

神奈川県レッドデータ生物調査報告書（1995）、近畿地方の保護上重要な植物（1995）、愛知県維管束植物レッドリスト（1998）など、地方版レッドデータブックが作成されている。なぜ植物を保護しなければならないのか。また、どのようにして保護していったらよいのか。このような重要な課題に対して、本書は指針を与えてくれる重要な文献である。

入手希望者は、郵便振替を使用し、通信欄に「自然史研究 2 巻 15 号購入希望」と書き、代金 1,000 円（送料 500 円を含む）を添えて、郵便振替口座番号「00980-1-317961」、加入者名「大阪市立自然史博物館友の会」へ申し込んでください。2 冊以上購入希望者は 06-6697-6221 へ電話されると送料が安くなる。（鳴橋直弘）

○ 田村道夫：植物の系統 A 5 判, 222 頁. 1999 年 2 月 10 日. 文一総合出版. 3,800 円.

高等植物を系統を踏まえて、主として形態からスケッチ風にかいた分類学の本である。

本書は、生物界の大分け、生活史、藻類、植物の陸上進出、陸上植物、コケ植物、維管束植物、シダ植物、種子植物、裸子植物、被子植物、被子植物の花の進化、単子葉植物の 13 章よりなっている。

この本は、専門書でもない教科書でもない参考書でもない、とにかく気ままに書いた、自分流の本である、と著者はいう。しかし、それほど枠を超えた本でもない。章ごとの分類群の説明は簡潔で解りやすいものであるが、著者の前著「被子植物の系統」三省堂（1974）と比べると見劣りするの、本書の出版意図が違うためだろうか。

本書には、最近注目されているラカンドニアの花などが図示されており、被子植物の 11 章は、著者ならではの説明で、簡潔にまとめられている。被子植物について興味を持つ読者には一読をお勧めしたい。（鳴橋直弘）

○ 渡辺典博：巨樹・巨木 B 5 変形判, 451 頁. 1999 年 3 月 15 日. 山と溪谷社. 3,200 円.

北海道から九州の屋久島まで、有名な巨木を写真で紹介したのがこの本である。巻頭 4 頁に日本全国に分布する巨木 212 本の分布図がある。本文は北から南へ県別に、1 頁に 1-5 枚のカラー写真で紹介。各写真には巨木の名称、樹高等のデータ、樹種名、推定樹齢、天然記念物等の指定、所在地、および管理者が記されている。時に、模式的な地図が添えられているものもある。巻末に、巨木の定義と測定法、全国の巨木概況、樹種別最新全国ランキングがある。

今年になって、日本一のブナの巨木が発見されたという記事を読んだ。こんな狭い日本でも、今だに未踏の地域があり、巨木が発見される見込みがある。巨木探しや巨木学入門者には良い本だが、少し巨木について研究してきた者にとっては、この種の本だけに、物足りなく感じられるのは仕方がない。

長年の風雪に耐えた巨木は、それだけで風格と威厳を持っている。そんな巨木の写真を見ているだけで、心が豊かになるような気がするのは私一人だけではないだろう。（鳴橋直弘）

○ 日本植物友の会編著：野の花山の花 B 5 変形判, 335 頁. 1999 年 6 月 30 日. 山と溪谷社. 2,000 円.

関東・甲信越を中心に、一部北陸、北海道、東北地方を含む地域の植物観察コース 132 コースを紹介した初心者用ガイドブックである。

本書は、はじめの 4 頁に、関東周辺 115 コースと北海道、東北 17 コースの分布図がある。街と公園 21 ヶ所、奥武蔵 13 ヶ所、奥多摩・奥秩父・中央線沿線 17 ヶ所、丹沢・湘南・箱根・伊豆 18 ヶ所、富士・東海 8 ヶ所、八ヶ岳・南アルプス周辺 9 ヶ所、上州・信州 9 ヶ所、房総・常磐 8 ヶ所、尾瀬・日光・那須 4 ヶ所、越後 8 ヶ所、北海道・東北 13 ヶ所が、それぞれ 2 頁ずつ、地図と植物のイラストを混えて、紹介されている。それぞれのコースでは、どんな花がいつみられるのか、どこにあるのか、そこへ行く交通手段は、コースの所用時間は、また、その場所の問い合わせ先が書かれており、便利なガイドブックとなっている。

本書は、本学会員にはもの足りない本と思われるが、それぞれの地域で、このような本が出来れば、植物を愛

好する一般の人々に大いに利用される。そのような本作りの参考になる。

巻頭部で、植物観察のすすめと同時に、標本作成のすすめの項目があって、アマチュアの植物採取をすすめている。採集の禁止されている場所では絶対にとらないようにとの注意が付けられているが、どんな場所でも、みだりに植物を採取することは避けるべきである。
(鳴橋直弘)

○ 加藤雅啓：植物の進化形態学 A5判, 242頁, 1999年5月20日, 東京大学出版会, 4,000円。

著者のここ10年ほどの、形態の進化についての持論を展開した本である。

本書は、かたちの進化を探る、基本器官の多様性と進化、担根体、「地下茎」、胚珠、形態の適応と進化、特異な形態進化、遺伝子からみた形態進化の8章からなっている。第2章の基本器官は解りやすく解説されているが、本全体を見ると、文章は教科書的であったり、時に随筆風であったりする。また、著者のいう進化形態学として、個々の章が有機的に繋がっていないように思える。しかし、この20年ほど、アジアの熱帯などで野外調査を繰り返してきた著者だけに、第6章の溪流沿い植物を中心にした形態の適応と進化は、面白く、またその課題の探究の道筋が解りようになっていく。このことから、読者も自分の形態研究の方向性を探ることができるだろう。一読を勧めたい本である。
(鳴橋直弘)

○ 千原光雄(編)：藻類の多様性と系統 A5判, 346頁, 1999年7月15日, 裳華房, 4,700円。

新鋭の研究者による藻類の系統分類の教科書である。

本書は3部よりなり、第1部は藻類の多様性と分類体系、第2部はさまざまな形質からみた藻類の多様性と系統・進化、第3部は藻類の各群ごとの解説である。この本は、単に藻類の各分類群について解説した本ではない。まず、藻類についての外堀(藻類の定義や生活、研究史、起源と進化)を埋めて、本丸である各分類群について書いてある。努力された結果だと思われるが、図は非常に解りやすい。

藻類は一つの分類群ではないと言われて久しいが、その正体の解明はなかなか進展しない。それでも、細胞構造の電顕による解析やDNAによる系統の解明は、確実にその成果を出している。この本は、現時点での藻類の系統分類を総括した本としては、一級のものである。
(鳴橋直弘)

○ 和賀山塊自然学術調査会(編)：和賀山塊の自然—和賀山塊学術調査報告書— B5判, 299頁, 1999年7月10日, 和賀山塊自然学術調査会。

「和賀山塊」は、秋田県と岩手県の境界にあり、奥羽山脈の中央部に位置する。この地域は、山が深く、また険しく、人を寄せ付けなかったために、今日までその自然が残されている。青森と秋田の県境にある「白神山地」に勝るとも劣らない自然があるという。

本書は、「和賀山塊」の魅力にとりつかれた山岳愛好家と、この地域に興味をもった研究者たちが、1990年から1998年の9年間にわたる実地調査をもとに、まとめあげた学術調査報告書である。

本書は、地形、地質、陸棲貝類、貝類化石、クモ類等についても書かれているが、植物関係では、植生、植物相、絶滅危惧種ヤマスカシユリ、アオモリマンテマをめぐって、オサバグサの生態—他地域との比較—、ウゼントリカブトの1新変種ワガトリカブト、蘚苔類相および和賀山塊産植物標本目録がある。標本目録には、和名、学名、産地、採取年月日、採取者がリストアップされている。また、巻頭には46枚のカラー写真がある。

調査地は、600m以下や1,200m以上の山頂部を除けば、オオバブナを中心とする夏緑林で、そこには多様な植生が見られるという。また、この地域は、アシウスギ、オオイタドリ、アキタブキ、オニシモツケ、トガクシシヨウマ等の日本海要素を多産するが、キバナウツギ、ナンブクロカンバ、オオウラジロノキ等も分布するという。ブナの研究者や日本海要素の研究者には、本報告書は重要な資料となる。

パンダやトキが注目され、スズメやトノサマガエルがいなくなっても不思議に思わないこの国では、本地域のような自然を後世に残すことは、大変難しいことである。実地調査に手弁当で参加された多くの研究者に敬意を表すると共に、今後もこの地域の自然が保護されることを強く望んでやまない。

入手希望者は、調査会事務局(〒010-0101 秋田県南秋田郡天王町字追分西93-11 男鹿南秋教育会館内)に申し込めば、送料・消費税込み5,000円で購入出来る。
(鳴橋直弘)